

佳作

## 支えてもらった体育大会

愛媛県 済美高等学校一年 秋川 航太郎

僕は中学三年生、義務教育最後の運動会がとても心に残っています。僕たちは七十期生という節目の学年でした。なのでどの行事においても、期待されている一年でした。そんな中、大きな行事として体育大会がやってきました。毎年三年生の男子は組体操を女子がダンスをするのが恒例です。しかし、男子の組体操は事故やけが多いという事でやらないという話が出ていました。しかし七十周年の記念という事もあり、最後の組体操をすることになりました。

もちろん最後の組体操という事もあり生徒、先生方がやる気に満ちていました。一学期終盤から練習を始め、五、六回で一つの技ができるようになりました。僕は身長も低く、大抵支えてもらう事が多かったです。一人一人が苦しい思いをするからこそきれいな形になるんだと実感しました。そこで試行錯誤していく中で友達との友情も深まっていき改めて友達のありがたさを感じました。そして長い夏休みが明け、本格的な練習が始まりました。

一学期までにやっていたことを思い出しつつ、指先までを意識したり、新たに技が加わるなど難しくなっていました。そして最後の特技として七段ピラミッドを選抜してやる事になりました。それを聞いた時は本当に実現するのかなど、他人事のように思っていました。さらに今年は曲に合わせて技を決める事にもなりました。少しずつピラミッドの土台となる人達が昼休みや放課後に呼ばれるようになりました。そして上の八人ほどが決まっていなかった時に体育の先生に呼ばれました。その時に頂上に登って旗を振ってもらうと言われました。その時は冗談だと思ったりいびくりしました。最初は他人事と思っていたピラミッドがそれを機に大きな責任を感じる技になるようになりました。その日から今まで会話した事もなかった人に頑張っってねと声を掛けてもらうなど精神的にも支えてもらいました。そのような事もあり、より一層頑張ろうという思いが芽生えました。次の日には選抜メンバーの名前がすべて発表され、誰がどの位置なのか分かりました。昼休みに五十名近くが集まり全体練習をしました。一段ずつ人が登っていくにつれ土台となる人の顔がともしんどそうになり、歯をくいしばっているのがよくわかりました。いざ頂上に登ってみると旗を両手で振れそうな安定感ではありませんでした。しかも、想像以上に高さがあり、とても驚きました。実は年少、小六と運動会の最後はなぜか毎回ピラミッドの頂上に登

っていました。しかし、その時の経験とは比にならないぐらいのプレッシャーと不安がありました。それに新たな課題として組体操を曲に合わせて技を決めることになりました。なので個人技から大技までをすべてテンポに合わせて技を決めてはならなくなりました。なので素早く上に登り旗を振れる体勢を作らなくてはなりませんでした。土台の人達の体力面・安全面を考慮したので全体で練習したのは、三、四回ほどでした。そのため、一回一回集中しコツをつかみ改善しながらしました。当日を迎え組体操の番です。緊張しながらも、いざ始まる個人技からピラミッドまでしっかりとできました。そして最後の大技です。一段二段と土台が出来ていくにつれて忘れていた緊張感が蘇ってきました。そして頂上に登り曲とびったり旗を振るとその日一番の歓声を浴びました。やり切ったという気持ちで満たされるとともに支えてくれた友達に感謝の気持ちでいっぱいになりました。この経験から学んだ事が二つあります。

一つ目は、それは人の支えです。もちろん組体操は一人でできる技もありますが、その多くは何人かで形を作るものが多いです。なので人の支えを強く感じました。しかし小学校の時はこんな感情はこんなにも強くなかったと思います。自分の成長を少し感じました。また人の支えは組体操だけでなく日常からあります。それは家族です。勉強面や精神面をいつも支えてくれています。ま

だまだ支えてもらっている面が多いですが、いつか返していきたいと思います。二つ目は人の優しさです。組体操でした。ピラミッドの土台になった人は上に登る数人に落ちないでねと優しく言葉をかけてくれました。自分の事で一杯なはずなのに気にかけてくれてほんとにうれしかったです。あんな風に周りに気配りができる人はほんとにすごいなと思いました。この経験から支えてもらい、優しくしてもらい一生忘れられない感動の体育大会になりました。